

令和6年度全国高校総体(山口大会)審判員報告書

C3 審判長 安福康夫

1 審判研修会の内容

(1)新ルールの変更内容

先の選抜大会から採用した新しいルールに関して、種別ごとに打ち合わせをした。各審判報告参照

(2)審判としての言動について

審判員の行動によって選手監督から不信感を与えてしまうことがあることについて再度確認した。大会現場での選手監督との接触や会場でのスマートフォンの使用などにも注意すること、新体操に関わる人への敬意の気持ちを忘れずに行動し、採点業務に専念することを全員で共通理解とした。

(3)採点研修

団体・個人ともに動画を見て採点し、問題となる点や採点基準について時間をかけて確認した。地方の大会で起こった問題点や傾向などについても情報交換をし、今大会の参考とした。採点練習については審判ごとの基準に差異があったため、丁寧に確認作業をした。各審判報告参照

2 採点上起こった事項

団体競技で演技中に復帰不能のけがをしたチームがあり、その場で審判長と競技部長の指示で演技を中止させた。採点は演技が2分に足りていなかったため0点とした。

3 感想

新ルール初めての高校総体ということで、選抜での傾向や地方大会を通して、いかに高い得点を取るかを選手やチームごとに工夫をしてきていることが感じました。

個人競技では様々な投げ方や受け方に挑戦している選手が多く、それだけにミスや乱れにつながっている傾向がみられました。団体競技では転回系で高い難度を取りに行くために、無理をしているチームが多く、その結果として事故が起き、演技中断を指示しなければならなくなったことは大変残念でした。新体操の演技の原則としてルールブックにも記されている「すべての運動が合理性と安定性をもって実施されなければならない。」という点で大きく問題を感じた部分です。

採点については新しいルールの目指す方向をしっかりとらえた採点ができたと感じます。難度の得点が明確になったことで、D スコアに注目が集まりますが、どの様な技も美しく確実にこなされなければ実施で減点されます。反対に美しい動きを極め、安定性をもって演技をすると必然的に A スコアが伸びていきます。実施が一番得点を左右するということを選手が理解して、技にとらわれすぎず、美しい動きを競うスポーツであることを目指して欲しいと感じました。

最後になりますが、本大会の運営に当たられたすべての役員・補助員の皆様に、全審判員を代表して心から感謝の気持ちをこめて御礼を申し上げます。

悪天候による被害で大会当日にフロアマットを移動させたり、大会終了後も選手役員が帰ることができないなか、細かいお心遣いをいただきました。計り知れないご苦勞があったと存じますが、大変すばらしい大会になったと思います。本当にありがとうございました。

<難度(D)審判>

D 審判担当 菅 正樹

1. 審判打合せ事項

(1)個人競技

- ・加点対象の投げ、受けの採用範囲の確認
- ・同じ内容の技を難度採用しない
- ・転回系の格上げ、転回系難度の確認
- ・ロープの縄跳びの難度と加点の確認
- ・A難度を見落とさない

(2)団体競技

- ・徒手系難度の採用範囲の確認
- ・跳躍の見落とし
- ・転回系難度の格上げや加点について確認
- ・4人団体に備えて難度の成立について確認
 - 転回系は3名以上実施で難度成立
 - 徒手系は5名実施で難度成立

2. 採点上起こった事項とその処理

(1)個人競技

シエネの回転不足で想定していた難度より一つ下の難度採用となるケースや、視野外投げとして認められず、加点とならないケースがあった。演技中での判断に迷う場合は映像で確認し、D審判・補審・審判長の先生も含めて常に確認しながら難度や加点を決定した。

(2)団体競技

- ・難度成立の判断が難しい場合、映像で確認し、難度や加点を決定した。
- ・倒立に関しては2秒静止に満たない場合、難度不採用とした。
- ・バランスでは、135度以上のバランスの際に肩の位置が腰より低い場合B難度として採用した。
- ・柔軟では胸が1名でもつかない場合、難度不採用とした。
- ・交差技では着地後に飛び越えている場合や、タンブリングが曲がって交差していない場合が多く見られたが、その場合は加点を採用しなかった。
- ・四方に散らばりながら、バラバラに転回系を行う場合、瞬間的な判断が難しく、映像を活用しながら採点を行なった。また、徒手系難度の認定条件については今後しっかりと基準を固めていくべきだと感じた。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会に関して、選手・監督がルール変更によりしっかりと対応してきていると感じた。なかでも個人においては同じ技を行っている選手はほとんど見られなかった。

上位の選手・チームは非常に高い難度で構成され、なおかつ明確に実施されており、映像で見返す事なく、難度や加点が判断出来る内容であった。

<芸術と多様性(A)審判>

A 主任審判員 菊地伸宏

1 審判打合せ事項

(1)個人競技

A審判がチェックする部分を確認し、速やかな採点を行うために、採点上、項目ごとにしっかりと評価する部分と全体的を見て評価をする部分、要素不足の減点について分けて確認していく手順などで共通認識をもった。

ロープの手離し操作については、片方を持ったままでも手離し操作とするが、単に片方を離しただけで、ロープの動きがないものは手離しとしないことを確認した。投げの種類と受けの種類についても確認し、背面での投げや前面での投げにも数種類あるため、同じ種類の投げについて確認した。

クラブの2部位、3部位の経過については、明確に身体の接触を伴わないものは採用しないことを確認した。

転回中の手具操作に関しても、同じ操作と取るものと、違う操作になるものを確認した。

要求要素については今回のルール改定で新しく入った投げタンブリングの有無について確認することと、投げタンブリングにも多様な実施方法があることを確認して見落としのないようにすることを確認した。また、各種目での従来からある要求要素については、各審判員で判断し、高さや長さでの不足があったと判断した場合に各自で減点を行う方向で基本的な共通理解を持った。

徒手系要素の多様性、運動量についての評価は従来と大きく変わらないが、新体操の根幹をなす重要な評価項目なので、どのような運動の組み合わせが高レベルのものかという部分の確認を行った。また、技に偏らず、運動のつながりが良く構成されている演技を高く評価するように共通認識を持った。

(2)団体競技

同時スタートや2段スタートなど転回系の要求要素に違反がないか正確に見極めることを確認した。個人と同様、採点上、項目ごとに細かく確認する部分と演技全体を通して評価する部分があるので、採点の手順を確認し、速やかな採点を行っていくことを確認した。

団体競技は同時性が魅力であり、採点項目にも盛り込まれていることから、転回系や徒手系も含めて同調性がありながら豊富な運動量や柔軟性、リズム変化などがふんだんに盛り込まれている演技を良いものとして評価していくことで共通認識をもった。

2 採点上起こった事項とその処理

(1)個人競技

・2部位、3部位を経過する操作(スティック・リング・クラブ)

確実に2部位(3部位)を経過していないものは採用しなかった。クラブでの2部位操作は落下の危険性が高いため、構成上取り入れていない選手も多かったが、体に触れず手具が跳んでいるものは採用しなかった。

・上肢以外の操作

単純に触れているだけのものは採用せず、動きのある手具を上肢以外で取ったり手具を動かしたりすることがなければ採用しなかった。特にクラブにおいて単に首や脇、脚に挟むだけで手具が動かない操作が多くみられたが、それでは上肢以外の操作とはならないことは周知していきたい。

・転回系の手具操作

転回中の手具持ち換え操作は判断が難しく、明確に持ち換えが見えなかった選手は採用しなかった。また操作が着地後となり、採用しなかった選手も多くみられたので、確実に空中局面の間において操作することを求めたい。つなぎA難度での操作も確実に見えるタイミングで実施したものを採用した。

(2)団体競技

転回系の途切れで、転回系の回数が超過したとみられるチームがあり、動画で確認した。ロンダードジャンプで転回系をつなぐ場合には、ロンダードの蹴りまでが転回なので、蹴る前に次の選手がスタートしていなければいけない。今回は動画での確認も行ったが、演技構成上、明確に途切れのないようなタイミングで実施することを周知していきたい。また、タンブリングミスにより、ロンダードでつなぎ予定が側転になってしまい、タンブリングの途切れとして扱ったチームがあった。組運動への助走も含め、判断に迷う演技もあったが、動画での確認を併用しながら処理した。

同時スタート、2 段スタートなどで、助走を回り込んでくる選手がいる場合、回り込んでいる部分はスタートとして扱わないことになっているが、助走と判断できる部分からストレートに入っているものは減点しなかった。

組運動のレベル判定については昨年末の1種義務研修で伝達したものをベースに判断したが、複合的に組み合わせているものについては、各自の判断で評価することとした。交差技のレベル判定についても同様で、大きく判断がずれることはなかったが、研修での合意を基に採点を進めた。

3 その他特記事項・意見・感想等

新ルールでの採点で大会が実施されるようになり、A審判では、これまで不明瞭だった採点項目を明確化し、採点することができるようになり、客観性の高いルールになったと感じている。個人・団体とも、しっかりと減点項目が決まっていて、機械的に減点できる部分と、新体操のあるべき姿から評価を考える部分に分かれているが、採点の手順をそろえることで、ブレの少ない採点ができたと感じている。

(1)団体競技

演技時間が短くなったことにより、これまで以上に徒手系要素とつなぎの動き、転回系要素をバランスよく入れることが求められるようになっている。今回もジャンプなどの難度を入れる、または組運動を入れるために演技の流れが悪くなり、リズムやダイナミズムが損なわれていると感じる部分があった。団体競技が大事とするシンクロ性と身体を極限まで使用した徒手系要素、そしてダイナミックかつ同時性を見せる転回系をバランスよくかつ流れ良く組み合わせることが必要とされるが、その大事にしたい部分を審判側でどのように得点化するか、今後の課題であると感じた。その中でも今大会では、複雑で高レベルの動きを流れ良く見やすい構成で行ったチームが上位に入賞したと考える。

(2)個人競技

特に手具操作の客観的な評価ができるようなルール改正になったと考えているが、採点してみると、手具の回しが少なくても減点する項目が少なく、理想とする手具操作をより適切に評価できる項目が今後、必要になると感じた。ただ、手具の投げ受けを含めて、これまで評価が不明瞭であった部分が項目を細分化して具体的な項目を設定したことにより、選手の目指す方向性が明確になり、客観的な評価ができたのではないかと感じている。ただ、難度を組み入れるために演技の流れが悪くなったり、大事にしたい身体表現の部分が抜け落ちている選手も見られた。その部分の評価を今後どのように得点に反映させていくか考えていく必要性を感じた。

<実施(E)審判>

E 主任審判 清本大介

1. 審判打合せ事項(個人・団体共通)

本大会は、新規則導入後初の全国高校総体であり、実施(E)採点に関する規則自体に変更はないものの、個人・団体ともに新規則に対応した演技構成が予想された。これに伴い、従来とは異なる演技構成やミスが見られる可能性が高く、E 審判として以下の点を確認した。

- ・A 項目(動きの質)については、減点幅の共有を行い、演技の質を正確に評価することを徹底。
- ・B 項目(ミス)については、審判位置による視認の違いを考慮し、減点箇所を採点メモに確実に記録することを確認。

(1)個人競技

手具操作においては、ロープ・クラブの特性を活かした振りや回し、投げ受けの技術が徒手系・展開系の技術と融合しているかを重視。伴奏音楽が単なるバックミュージックではなく、演技と一体化しているか、演技全体が途切れることなく構成されているかを評価の観点とした。

(2)団体競技

美しい姿勢や柔軟性、徒手系の技術、転回系のスピード・高さ・着地の安定性を重視。チーム全体の一体感、動きのスケールの一致、音楽との調和を評価の基準とし、個人競技と同様に演技と音楽のイメージの一致を確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

特筆すべき事象はなかったが、以下の点が印象的であった。

新規則の傾向として、難度(D)、芸術と多様性(A)と比較すると、実施(E)においては有効点の開きや、採点の最高点と最低点の差が大きくなる場面もあった。特にミスの多い選手や基本的な動きができておらず、転回系や投げ技に偏った選手の際にこの傾向がみられた。技やミスに惑わされず、動きの質の見極めることを重視する必要がある。

3. その他特記事項・意見・感想等

新規則の導入により、個人・団体ともに演技に新たな工夫が見られ、E 審判としても採点の精度と柔軟性が求められる大会であった。

(1)個人競技

- ・上位層:完成度が高く、新規則下でも安定した演技を披露。E 項目での減点が少なく、技術と表現力の両面で優れていた。
- ・中位層:動きの質は良好であるがミスが目立つ選手、またはミスは少ないが動きの質が不足している選手が混在。今後の課題として、両項目のバランス向上が求められる。
- ・下位層:基本動作の不安定さ、転回系・手具の投げ受けにおける大きなミスが散見された。基礎力の向上が必要。

(2)団体競技

- ・上位層:演技の完成度が高く、徒手系・転回系の技術、同時性、音楽との調和が優れており、E 項目での減点はほぼ見られなかった。
- ・中位層:ミスの減点よりも、動きの技術や全体の調和といった A 項目の不足が印象的であった。

・下位層：徒手的要素でのふらつきやばらつき、無理なタンブリングによる大きなミスが目立った。演技構成の見直しと基礎力の強化が求められる。

本大会は、新規則に基づく新たな挑戦が随所に見られ、選手・チームの創意工夫が光る大会であった。E 審判として、今後も演技の質とミスの両面を的確に評価し、選手の成長を支える採点を心がけていきたい。